

佳作

「ばあちゃんいつもありがとう」

山形県
新庄市立日新小学校四年

本間 貴大

ぼくが三年生の秋の終わりのころでした。

「この家へいられなくなつた。別のところへ引っこすから。」
とつ然お父さんから言われた、あのときのおどろきは今でも
わすれられません。

じいちゃんの仕事があまくいかなくて、借りたお金を返せ
ないから、ぼくのおうちが売りに出されるというのです。話
を聞いているうちに、ぼくの目からなみだがぼろぼろあふれ
てきました。頭にかんだことを聞いてみました。

「神社どうするの。」

おうちのわきに神社があつて、ぼくはいつもその辺で自転
車乗りをしたり遊んだりしていました。夏には、大好きな
お祭りの前のおはやし練習も、神社の前でしました。町内
みんなのものだそうですが、何かあるとじいちゃんがおそな
え物を用意して、おがむときもぼくを連れていつてくれてい
たのです。だから、お父さんの次はぼくが神社を守るんだ
と思つていたからです。

もう一つ、心配なことがあります。それは引っこす所はせまく
て、じいちゃんばあちゃんがいつしよに行けないということす。
いつも仕事で帰りのおそいお父さん・お母さんに代わつて、
ほくたち三人姉弟のめんどうをみて、大きくしてくれたの
はばあちゃんです。ぼくは、ばあちゃんにおんぶされるのが
大好きでした。二人で「日本昔ばなし」のビデオを見るのが、
大好きでした。ぼくの大好きな大相撲の対戦アルバムを、場

所ごとに作つてくれました。小さいころからやったトランプ。
チラシのうらにメモした勝負の数を数えてみたら、八百七十
回をこえていました。最初は負れるとくやくして、よく泣い
てあべれたけれど、コツを覚えて強くなつたし、負けても泣
いたりいじけたりしなくなりました。

「ばあちゃん、今までありがとう。」

考えているとおなかのあたりが、じわじわあつたかくなつて
きて、また涙が出てきました。

あれから、半年になります。結局、ぼくのおうちは、そば屋
さんになりました。じいちゃんとはあちゃんは、別のアパート
にくらしています。

でも、学校から帰つてくると、ばあちゃんはおくんちのかぎ
を開けて、おやつを用意して待つていてくれます。前と同じ
ように、お姉ちゃんたちの部活やピアノの送りむかえをして、
ぼくも元気に遊びに出かけます。夕飯も作つてくれます。
みんな、ばあちゃんごつおが大好きです。

ばあちゃん、いつもありがとう。ばあちゃんがいると、家族
みんな安心です。前は当たり前だと思つて気づかなかつた
けど、ぼく分かるようになったよ。

ぼくの家族に大きな声で言いたい。

「別々にいても家族だよ。またいつしよにくらせるように、
ぼくがんばるからね。」